

…その頃、風に運ばれていたアイは一番望んでいた高い空の旅を楽しみながら、風と話をしておりました。



「ねー風さん。風さんって…、僕らをひっくり返したあの風さんなの？」

「ああー、そうだよ」

「僕、またみんなのところに戻れるの？」

「サアー、それはどうかな…何事かを学んだら、よい場所へと届けてあげるさ」
「風さん！僕だけどうしてみんなとばらばらになったの？」

「…誰もが、自分の望む場所へと運ばれているのさ。…それは、ワシのせいではないのだよ。大体は、おまえの望みがおまえの行くべき場所へと運んで行くのだからー」

「…僕には、何が何だか解らないんだ…僕はどつして生まれてきたの？何のため？…、苦しい思いをするのはどうして？…僕が、何かいけないことをしたから？ねえー、教えて下さいー風さん。…僕は、どこへ行くの？」

「誰もが知る場所だよ。行けば誰もがその答えの解る場所だよ。そこはー、本当の自分の姿の見える場所さ。」

…それまでは、苦しみも味わうが、それはおまえの“永遠の証”となるためなのだから。

これから先、他の色と交わりなが、苦しみと喜びとを分かち合いながら、おまえがおまえ自身に近づいて行くのだよ—

自然とは、そのように互いを支え合う姿として美しくなるのだから—

“虹”を見てご覧—」

「…“虹”、にじって?…どこ?どこにあるの…」

「ははは…、そのうち見るときが来るさ—。そしたら思い出してご覧。虹はそのことを世界中に知らせるために現れる“印”なのだよ。

…おまえは、そのことを人間に伝えるために遣わされた“遣い”なのだから—」

「えっ、…僕が?」

「そうだよ。…人間はお前を通して“自分”を識るために“おまえ”を見出したのだよ。人間は、虹に書かれている言葉を見つけ出すためにお前に近づき、お前を作り出したのだから。…お前は心配せずにお前自身であり続ければ、それでよいのだから—」

アイはこの風の“ことば”に、勇氣と希望を貰いました。

「そうだったんだ…僕は、僕のまま、楽しいことは楽しいって…苦しいことは苦しいって!、ただそのことに正直であり続けなければいいんだね。—ありがとう、風さん!」

そしていつの間にか…

アイは再び海の近くへと運ばれて行き灯台の近くまで来ると、そこで風とさよならをしました。

生まれて初めて見る灯台は、白い小さなタイルを全身に纏い、湿り始めた空の色を映して佇んでいました。

アイは、暫くの間ただ黙って…

遠くを見ている灯台を見上げていました。

そして、じっと佇む灯台に、恐る恐る尋ねてみました。



「…何を見ているんですか？」

その言葉が届いているのか、それとも届かなかったのかが判らないまま、アイは、次の言葉をかけることができませんでした。

…暫くあって、

「遠くだよ…ずっと沖の方だ」
と、独り言のように灯台が言いました。

「何が見えるんですか？」

「あー、なんでも」

「なんでも？—それはどういう意味？どんなもの？」

「この世の、過ぎゆく全てのことだ…」

「…えっ、それは？楽しいこと…それとも、苦しいこと…」

「…」

灯台は、それっきり黙ってしまいました。

アイの知らないような辛いことにも、じっと耐えてきたであろう灯台の姿は、美しくもあり、凜々しくもありまた厳かでありました。—アイはじっと、灯台の立っているその場所を胸の痛くなる思いで見つめていました。